

12月議会川口の一般質問より 環境施策の現状と今後の取組みについて

緑池とは

川越市内で「緑地」とされているはどのような土地かご存知でしょうか。市内で緑地としている土地の約6割は農地ですが、下の写真のように、コンクリートしか目に入らない場所も緑地にカウントされています。



学校施設

都市公園

公共施設

Q, (川口) 川越市では緑化状況を把握する指標として、都市公園、学校、公共施設等も施設緑地として緑地面積を算出しているが、他の自治体の中には、緑で覆われている土地の面積の割合「緑被率」を測定し緑の量を把握している自治体も少なくない。市域の何の状態を把握すべきなのかを考え、緑被率の指標化を検討すべきでは？

A, (環境部長) 測定に係わる費用やその費用対効果も含め、調査研究していきたい。

緑化施策に「質」の視点を

公園の樹木、街路樹、公共施設の植え込み、屋上・壁面緑化等、これまで市の緑化は、価格と管理のしやすさを基準に行われてきました。多くの安価な外来種が生態系に影響を与え、維持管理を優先し、画一的に種を選定している現状は、生物多様性の妨げになるだけでなく、防災の観点や、ヒートアイランド対策等への考慮もできていません。「量」を増やすことも重要ですが、植栽場所と目的に応じ多様な植物を選定をするなど、「質」の視点を入れて緑化施策に取り組むことも重要と考え、市の見解を問いました。

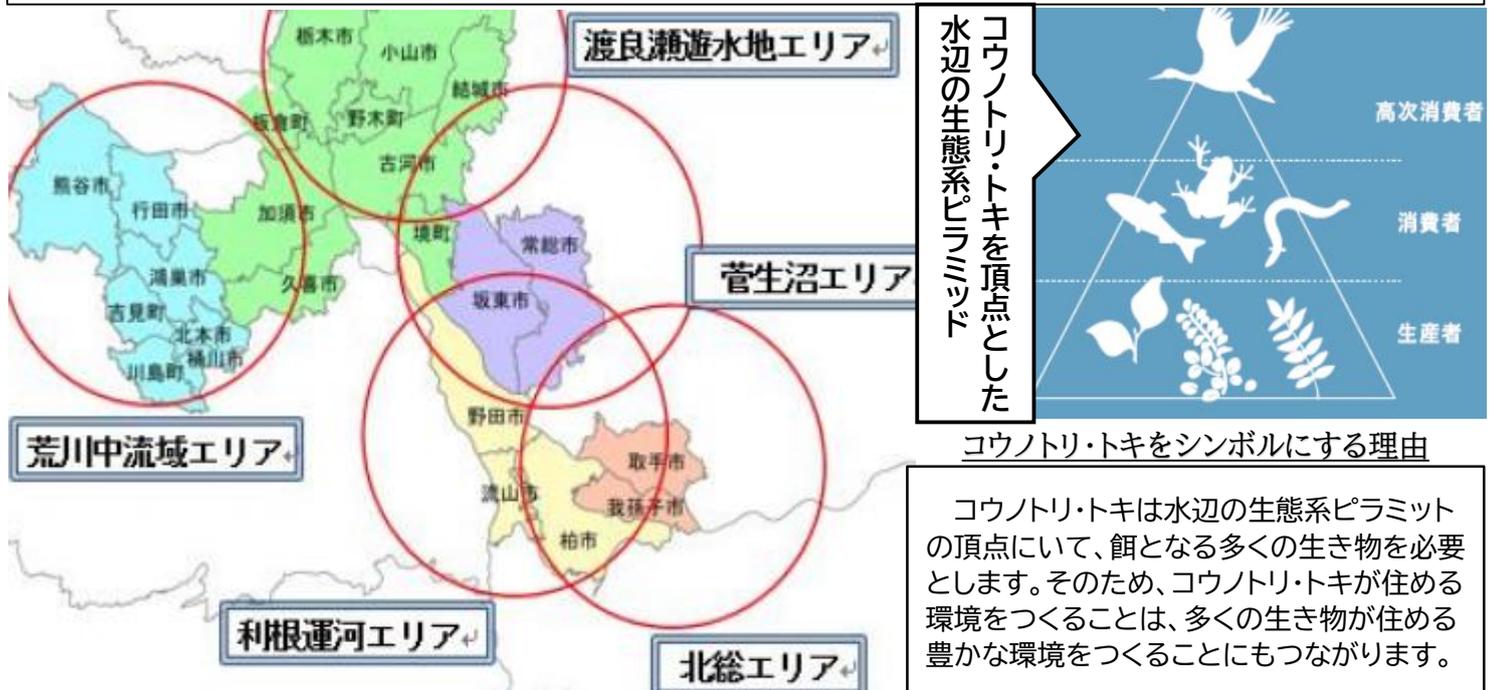
市も、「より具体的な質の視点を入れた緑化施策に導入について、他市の事例を参考にするなど、検討していきたい」との考えを示しました。

コウノトリで地域振興・経済活性化?!

稲作の行く末と環境保護、経済活性化を考え、天然記念物であるコウノトリ・トキを指標として広域的に連携している「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」への参加検討を求めました。

市は、「本市の地域性や目指すべき方向性を考えた上で調査研究したい」と答えましたが、川島町まではコウノトリの飛来記録があり、本市が加入する意味は大きい上、伊佐沼周辺への飛来も夢ではなく、地域振興に繋がる取り組みと考えます。

関東地方における、「エコロジカルネットワーク形成」「魅力的な地域づくり」を目指して2010年に発足した自治体間ネットワーク。渡良瀬遊水地エリア、利根運河周辺エリアなど7つのエリア、27自治体(2022年10月現在)から成り立っており、各エリアにおいて地域特有の地勢を生かしたコウノトリ・トキの野生復帰に向けた環境保全と地域経済の両立を図った取組を推進している。



コウノトリ・トキをシンボルにする理由

コウノトリ・トキは水辺の生態系ピラミットの頂点にいて、餌となる多くの生き物を必要とします。そのため、コウノトリ・トキが住める環境をつくることは、多くの生き物が住める豊かな環境をつくることにもつながります。

